

りそな外為レポート

りそな WEEKLY COLUMN

りそな外為レポート

いよいよ始まるオリンピック (P2)

りそな銀行 市場トレーディング室
カスタマーディーラー 中里 信介

今週のドル円予想レンジ **109.20 ~ 110.70**

りそなWEEKLY COLUMN

6月FOMCショックについて (P3)

関西みらいフィナンシャルグループ
ストラテジスト 荻谷 将吾

- 6月のFOMCは、市場の予想以上に引き上げられたことを受け、金融緩和が予想よりも早く縮小されるのではとの観測が高まる
- 来週のFOMCから8月のジャクソンホール、9月FOMC等、金融政策イベントが相次ぐ
- 米国の物価・それを受けた米国金融性悪の方向性には目を離せない展開が続く

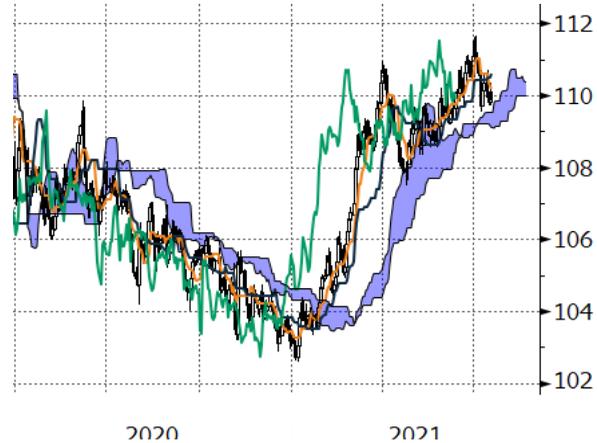
2021/7/19

りそな外為レポート いよいよ始まるオリンピック

今週のドル円予想レンジ **109.20 ~ 110.70**

(りそな銀行市場トレーディング室予想 発行当日の10時時点)

◆ドル円一目均衡表（日足）



◆為替相場のすすめ

先週のドル円相場は、週前半は110円台半ばで推移していたものの、米金利低下に連れてドル安円高方向へと推移、109円台が見え隠れする展開となった。米金利低下の引き金となったパウエルFRB議長の議会証言では、金融緩和の長期化が示唆される“ハト派”的な内容が示され、依然として緩和縮小への道筋が容易でないことが伺える。一方でNZ中銀やカナダ中銀では早くも金融緩和縮小に向け債券購入の減額を行っており、マーケットでは米国の緩和縮小も早ければ年末には実施されるのではとの思惑がある。来週にはFOMCを控えており、引き続き金融政策の動向には留意が必要である。

いよいよ、今週からは東京五輪が開催となる。21日（水）の女子ソフトボールを皮切りに大会日程はスタートし、開会式は23日（金）。開会式に伴い、昨年と同様にカレンダー上は木曜日・金曜日が祝日となっている。マーケットは夏枯れ相場入りの様相を呈しているが、祝日中の値動きを取っていくためにも、ぜひともリーブオーダーを推奨したい。
(カスタマーディーラー 中里信介)

◆今週の日程

| | |
|-----------|-------------|
| 19日 (月) 日 | 7月月例経済報告 |
| 20日 (火) 日 | 6月CPI |
| 20日 (火) 米 | 6月住宅着工・許可件数 |
| 21日 (水) 日 | 6月貿易統計 |
| 21日 (水) 米 | 20年債入札 |

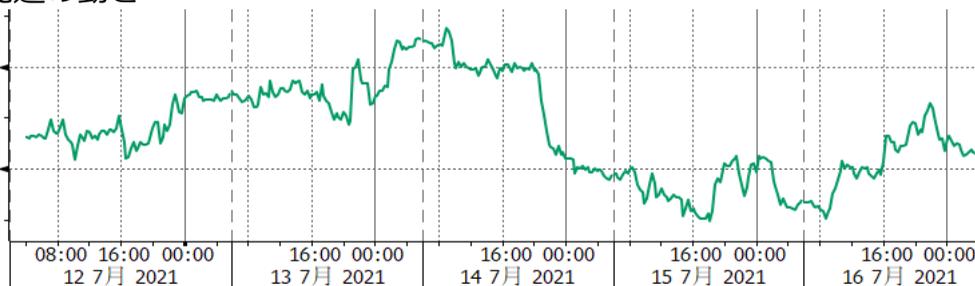
| | |
|-----------|-----------------|
| 22日 (木) 欧 | ECB理事会 (結果発表) |
| 22日 (木) 米 | 6月中古住宅販売 |
| 22日 (木) 他 | G20財務相・中央銀行総裁会議 |
| 23日 (金) 日 | 東京オリンピック開会式 |
| 23日 (金) 欧 | 7月ユーロ圏PMI |

◆今週の予想 (ドル高 強い ↑ 普通 ↑ ドル安 強い ↓ 普通 ↓)

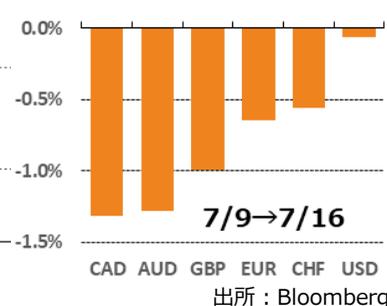
NY引け値 7月16日(金) 111.07円 VS 7月16日(金)

| 東京 | | | | | | 大阪(りそな) | | | | | 埼玉 | | | 大阪(関西みらい) | | | | | 神戸 | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|---|---------|----|----|-----|----|----|----|----|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 井口 | 小林伸 | 石川 | 田中 | 中里 | 范 | 伊藤 | 村永 | 岩田 | 小林翔 | 上野 | 曾根 | 鈴木 | 武富 | 湊真 | 中太 | 石井 | 中根 | 津田 | 佐藤 | 中山 | 内田 | 荻窪 | 藤森 | 三好 | 石田 | 尾股 | 中野 | 荻谷 | 辻村 | 山木 | 下川 | |
| ↑ | ↑ | ↓ | ↓ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | ↑ | 休 | 休 | ↓ | ↓ | ↑ | ↓ | ↓ | ↑ | ↑ | 休 | ↑ | 休 | 休 | 休 | ↑ | ↓ | ↓ | ↓ | ↑ | ↑ | ↓ | ↓ | ↑ |

◆先週の動き



主要通貨対円パフォーマンス



◆注意事項
お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

2021/7/19

りそな WEEKLY COLUMN

6月FOMCショックについて

- 6月のFOMCは、市場の予想以上に引き上げられたことを受け、金融緩和が予想よりも早く縮小されるのではとの観測が高まる
- 来週のFOMCから8月のジャクソンホール、9月FOMC等、金融政策イベントが相次ぐ
- 米国の物価・それを受けた米国金融性悪の方向性には目を離せない展開が続く

関西みらいフィナンシャルグループ
ストラテジスト 荻谷 将吾

➤ イベントが目白押し の米国金融政策

6月のFOMCでは金融政策が現状維持となりましたが、FOMCメンバーの将来の政策金利見通しが、市場の予想以上に引き上げられたことを受け、金融緩和が予想よりも早く縮小されるのではとの観測が高まりました。

市場が金融緩和の早期縮小、その後の金融引締めまでを意識し始め、金融市場に動揺が起き、一時株価が急落する等、“FOMC ショック”とも呼ばれましたが、その後パウエル議長の“火消し”発言により、市場は落ち着きを取り戻しつつあります。

今後、来週に再度FOMCを控えているほか、来月はジャクソンホールでのFRBのシンポジウム、9月のFOMCでは、2024年の政策金利の見通しが示されるなど、米国金融政策に絡むイベントが目白押しです。以下では、6月FOMCショックを振り返り、インプリケーションについて考えたいと思います。

➤ 6月“FOMC ショック”の経緯

2020年3月のコロナウイルス拡大以降、米国FRBは政策金利の引下げや大規模な資産の買入れを実施、経済の下支えを行ってきました。それから1年が経過し、コロナウイルスの収束が見え始め、経済指標に大きな改善が見られるとともに、物価指標の上昇が目立ち始めております。

金融市場では景気回復・物価上昇を背景に、“今後金融緩和を縮小していこう”との見方が大勢ですが、FRBのパウエル議長は、「物価の上昇は一時的・危機は脱していない」と金融緩和を継続するスタンスを示してきました。

従って、6月FOMCの事前予想では、パウエル議長の緩和継続スタンスの再表明や、FRBメンバーの「ドットチャート」FOMCメンバーの政策金利の見通し)の小幅な上げにとどまるというのがコンセンサスでした。



① 予想外の 「ドットチャート」

6月16、17日に開催されたFOMCでは、予想通り金融政策の現状維持を決定しました。しかし、四半期ごとに公表する「ドットチャート」では、市場予想以上に政策金利の見通しが引き上げられました。前回は2024年以降に利上げ開始とされていましたが、今回は2022年に「1回」の利上げを支持するメンバーが増加、2023年の「2回」利上げがメンバーの見通しの中央値となりました。

2021/7/19

りそな WEEKLY COLUMN

パウエル議長はFOMC後の記者会見で、「緩和縮小の議論を開始する」と発言し、今後FRBは金融緩和の縮小に向かって議論を進めることを市場に対してアナウンスしました。

②タカ派発言による金融市場の動揺

FOMCを受けて、金融市場では金融緩和が想定以上に早く縮小されるのではないかとの観測が高まったことに加えて、その週末にFRB高官のブラード氏（セントルイス連銀総裁）が「2022年後半の利上げを予想している」との発言により、市場は早期の利上げ観測を高め、景気への悪影響懸念から米長期金利が低下、株価は大幅下落し、円高が進行しました。

③FRB議長が“火消し”へ

その翌週にFRBのパウエル議長が、「FRBは予防的な利上げは行わない」「物価上昇は一時的と予想」といった発言をしました。先日のブラード氏の発言による市場の動揺への“火消し”のような発言で、市場には一定の安心感が広がりました。その後もFRBのメンバーから金融緩和の継続を示唆する発言が続き、FRB全体が“タカ派”に傾斜しているわけではなく、メンバーの意見がまとまっていない状態であるということが確認され、市場は落ち着きを取り戻した模様です。

➤ 今後の見通し

FRBが次に金融政策の方向性を示すタイミングとして予想されているのは、8月末の米国ワイオミング州カンザスシティで開催される経済シンポジウム、通称“ジャクソンホール”とされ、パウエル議長が金融緩和政策の縮小を示唆した後、年内のFOMCで2022年からの資産買入縮小売却テーパリング開始を決定、2022年の早い段階からテーパリング開始、とされています。利上げ時期に関しては、分かれているものの2023年から開始するとの見方が多いようです。

今回のFOMCでは金融政策は現状維持となり、結果としてパウエル議長は従来通りのスタンスを示しましたが、足許の経済指標は改善が続いており、今後金融緩和の縮小に向かっていくことはほぼ間違いないと思われます。

重要なポイントは、パウエル議長の発言にある物価が“一時的な上昇”に留まるかどうかという点です。FRBが予想するよりも物価上昇が続いた場合には、FRBのメンバーから金融引締めを支持する声が増えることにより、FRBが早期に利上げをせざるを得なくなってしまう事態が想定されます。

その為、米国の物価関連の経済指標に注目が集まっています。物価が“持続的な上昇”と判断されてしまう程の強い結果が続く場合には、“市場参加者のコンセンサス”が修正され、「FRBが予想よりも早く利上げに動く」ことを市場が織り込むことで、市場の動揺が高まる局面も予想されます。米国の物価・それを受けた米国の金融政策の方向性には目が離せない展開が続きそうです。

